

千載集の成立過程について

——私撰段階の存在とその意義——

松 野 陽

註¹ 論文の恩恵を蒙つてゐることを記しておきたい。

二

拾芥抄によれば、千載集の院宣宣下は寿永二年（1183）二月のことであつたといふ。現在のところ院宣宣下に関する資料としては拾芥抄が唯一のものであり、疑問が残るが、一応はこれに従ふこととする。

さて、この時に前に俊成により編纂されてゐた「撰集の様なるもの」「打聞」とは、どうやうな時期に、どのやうな性格を持つたもので、千載集とはどのやうな関係にあつたものなのであるか。ここではまづ、時期の問題から考へてみたい。

寿永二年二月以前に俊成が撰集をしてゐたことを示す資料としては、次の如きものがあげられる。

A 栗田口別当入道集

皇太后宮大夫俊成卿うちきゝ撰すときゝしかは
もしは草かきあつむなるわかのうらのその人なみにおもひいて
すや

勅撰集の成立過程は、形式的には、勅宣（院宣）宣下によつて撰者が編纂作業を進め、完成後奏覧することによつて完了する、といふ過程を経るのであるが、具体的に各勅撰集の成立過程を検討してみると、各集にはそれぞれ独自の過程があり、一つの単純な型に依つては把握し得ない複雑な成り立ちを持つてゐることは既に周知の事実である。そして、それぞれの独自の成り立ちが各集の性格と大きな関係を持つてゐることは当然のことながら特に注目されてよい点であると思はれる。ここに採りあげる千載集の場合もまた例外ではないのであつて、院宣宣下以前に既に私撰集ともいふべきかなり纏つた集が存在して居り、それが基盤となつて勅撰集としての形に發展したのではないか、といふ成立過程が推定されてゐるのであるが、この過程を更に明らかにすることによつて、千載集の持つに至つた性格について考察してみたい。

なほ、右の院宣宣下以前に存在した俊成の「撰集の様なるもの」並びに「打聞」に関する問題については、特に谷山茂氏の諸

かへし

いまもなほなれしむかしはわすれぬをかけさらめやはわかのう
らなみ

* 風雅集卷十七雑下

粟田口別当入道集は藤惟方の家集であり、惟方は二条天皇近臣として天皇権力の拡大に努め、親政を推進しようと図つた為に後白河院権力と衝突し、永暦元年(1160)追放されて長門に流された人物である。葉室流で俊成の甥にあたり、平治の乱では微妙な役割を果たしたことは有名である。惟方は仁安元年(1161)三月召還されるが、帰京後は大原東山等で閑居生活を送る。この俊成との贈答歌も、恐らく帰京後間もなくのものと推定される。その根拠は、この集の構成が、四季・神事・公宴・雑・恋等の各部内の配列が作歌年代順のものとなつてゐて、この贈答歌の前の歌は、仁安二年(であらう)正月廿日とその翌日の日想房寂超(為経)との贈答歌であり、後の歌は西行との贈答歌で帰京後さう時を経ない秋の頃の歌であるから、少くとも仁安二年正月廿日以降の、さほど時を置かぬ時期に俊成との間に交されたものと考へられるからである。同集の奥書に

本云
此腰折等

仁安二年暮春取集 此後亦阿三巻書統 而未取捨

文治五年二月中旬記之

とあるもののうち、「仁安二年暮春取集」とあるのは、俊成の撰集の噂が刺戟となつて、赦免以前の自己の作品を編んだ最初の段階の時期を示唆してゐるのではないだらうか。

A' 長秋詠藻

前中納言師仲卿下野の国より帰京の後配所にして詠みたりける歌どもとてみせにつかはしたりしかへすとてつかはしけるいかばかり露しけくればあつまちの言のはにさへ袖のぬるらむ返し

師仲卿

おもひやれむろのやしに年を経て煙になれし袖のけしきを

* 玉葉集卷十四雑一

これは必ずしも撰集の状況を示す資料とはいひ難いが、師仲が惟方と配流の期間を丁度同じくしてゐることであり、後の千載集での両者の入集状況、及び入集歌の内容が酷似してゐるので、同じく撰集の資料となつたものとみたい。とすれば、これもAとはほ同じ時期で、仁安年間のことと考へられる。なほこの例は次のB及びFと合せて、もう一度後で触れる。

B 山家集

左京大夫俊成歌集めらるゝと聞きて歌つかはすとて

花ならぬ言の葉なれとおのつから色もやあると君ひろはなむかへし

俊成

世を捨てて入りにし道の言の葉ぞあはれも深き色は見えける

* 長秋詠藻・統拾遺集卷十二

これは、俊成が左京大夫であつた応保元年(1161)九月十九日から仁安元年正月十二日までの間のものと考へられてゐるが、同じ贈答歌が長秋詠藻に所収されて居り、その詞書には「西行法師高野に籠りて侍りしが、撰集の様なものすなりと聞きて、歌書き集めたる物送りにて包紙に書きたりし」とあつて西行の高野在住の時期との関係から「左京大夫」は「右京大夫」の誤りであつ

て俊成が右京大夫であった時期（仁安三年（1168）十二月十三日）
安元元年（1175）十二月八日）の終末頃にまで下げて考へる説^{註2}
もある。これは後にFと共に合せて考へたい。

C 平経盛卿集（谷山茂氏蔵本）^{註3}

左京大夫俊成卿打聞せんとて故刑部卿のよまれたる歌どもを
尋ね侍りしかばつかはすとて

* 風雅集卷十七雜下

これも「左京大夫」とあるから、はゞBと時期が同じ頃のもの
であらう。この場合は俊成の方から撰集の資料（故刑部卿は経盛
の父である忠盛）を求めた例である。

D 清輔朝臣集

俊成入道うちぎせらるるとききて我ことのはのいりいらず
聞かまほしき事を尋ぬとて

さをしたかのいるのゝ薄ほのめかせ秋のさかりに成はてすとも

この歌の作歌年代は不明であるが、清輔の歿した治承元年（1171）
六月二十日以前のものであることには間違ひない。詞書の
「俊成入道」（俊成は安元二年（1176）に出家）は清輔集成立時に
於ける表記であつて、この歌の作歌年時を限定するものではある
まい。なほ、類従本清輔集所載歌の中、作歌年代の判明するもの
は、承安初年頃までのものに限られるやうである。この歌の内容
からすると、俊成の撰集作業がかなり進行してからのものである
やうに思はれる。

E 月詣集卷九雜下

俊成卿のもとへ集おくりつかはすとて詠てそへ侍りける

賀茂重保

そのかみの流れをくまば賀茂川のみくづなりともかきな洩しそ
月詣集は寿永元年十一月の成立であるから院宣宣下以前の歌で
あることは間違ひないが、何時頃のものは皆目見当がつかな
い。

F 長秋詠藻 下巻雜歌

撰集の様なことしける時ふるき人の歌どものあはれるな
どを見てよめる

行末は我をもしのふ人やあらむ昔を思ふ心習ひに

* 新古今集卷十八雜下

この歌の作歌年代は、A・Bと合せて、長秋詠藻の配列から推
定してみたい。

書院部藏定家奥書本長秋詠藻は、長秋詠藻の第一段階の成立を
示す奥書を持つので注目されてゐるが、^{註4}その下巻雜部所収歌の作
歌年時判明歌を「此三卷治承二年夏依仁和寺宮召所被書進也云々」と
ある奥書の部分まで（^{註5}續国歌大編帯 号四七九まで）一覽にしてみると次頁の表の
如くなる。

奥書の「此三卷」とは上・中巻及び下巻の中この奥書の部分まで
を指すものと考へられ、それが仁和寺宮（守覚法親王）に進獻さ
れた原形であると一応は考へられるが、下巻の、雜歌（三六〇）
四〇一）及び釈教歌（四〇二）四六七）は問題がないものの、神
社歌の部分は別雷社歌合の歌である四七四迄が神祇歌と考へ得る
歌であつて、四七五〜四七九はむしろ雜歌として扱はるべき性質

〔長秋詠藻雜部作歌年時表〕

雑歌

統国歌 大親番号	作歌年時	備考
360	保延元	
1	" 5	
2		
3		
4	永治元	
5	康治元	
6		
7		
8	仁平元頃	
9	康治元	
0	以前	
1	天養元	
2	仁平元	
373		
↑		
386	保元元	
7	永暦元	
8		
9	仁平元頃	
390	久寿2	
1	保元元	
2	永暦元	
3	"	
4	"	
5	"	
6	応保元	
7		
8	仁安元	A'
9		
400		
1		B

釈教歌

402)	康治頃	
429)		
430		
1		
2		
3		
434)	永暦元 以前	
456)		
7		
8		
9		
460)	嘉応2	
467)		

神社歌

468	仁安元	住吉社歌合 広田社歌合 別雷社歌合
9	嘉応2	
470)	承安2	
1)	治承2	
2)	3月	
3		
474)		

(雑歌)

475	安元2 " 治承元	F 出家
6)		
7)		
8		
479		
奥書		
480)	治承2 7月	右大臣家 百首
579)		

の歌であるので、四八〇以下の右大臣家百首の歌と共に、或は治承二年夏以降に付加された部分である可能性もないとはいへない。

何故これが問題となるかといふと資料Fが四七五の歌であるので、四七九以前が全て治承二年夏進獻の原形本とすれば「撰集の様なる事」が確実にその時以前に行はれたことを示すことになるし、四七五～四七九が以後の付加とすれば、院宣以後のものである可能性も否定出来なくなるからである。

しかし、この部分は全て述懐の内容の歌であるところから、恐らく別雷社歌合の最後の述懐題の歌に接続されて配置されたものと思はれ、奥書以前の部分には治承二年夏以後の歌が一首も発見出来ないことからみても、Fはそれ以前のものとして考へてよいと思はれる。

しかば、A・B・Fの時期はどの程度迄限定することが出来るであらうか。

右の表によつて看取される如く、長秋詠藻下巻は、雑歌・釈歌・神社歌（雑歌）の内部はそれぞれは、作歌年代順の配列となつてゐることが知られる。従つて、Aは仁安元年三月二十九日の師仲召還以降の作であり、Bは恐らくそれ以降、又Fは四七六・七の作歌年時、安元二年九月以前、とほゞ推定することが出来る。そして、A・Bは雑歌の最後尾、Fは（雑歌）の冒頭に位置してゐるのであるから、BとFとは連続した関係にあるといへる。それ故、長秋詠藻の配列を根拠としていへば、仁安元年三月二十九日以降安元二年九月以前に「撰集の様なもの」は編纂されつゝあつた、といふことが出来る。

以上A～Fの資料を綜合してみると、B・Cの「左京大夫」の問題は長秋詠藻の配列に於けるBの位置によるのみでは必ずしも解決とはならないが、A・A'・Bによつて、仁安頃を編纂過程の中心期と見ることは可能であらう。Aは惟方が帰京を許されない頃から撰集が既に始まつてゐたことを感じさせるし、Cは長寛頃経盛が俊成の家の近所に住んでゐて親しく交際してゐたらしいことと或は関係があるかもしれないから、撰集作業の開始は更に繰り上げる必要があらう。さすれば「左京大夫」の時期に重つてくるわけであるが、年時の明白な仁安年間を特に重視した上で、俊成が左京大夫に任ぜられた応保元年九月十九日を撰集の時期の上限とすることにした。下限は、（といつても私撰集として完成したか否かは問題であるが）Fの歌は撰集作業中の感懐であるとしても詞書は治承二年夏現在の執筆と考へれば「撰集の様なものとしける時」とあるから、集の完成未完成は別として撰集作業の

過去に於ける終了を意味すると見做せるので、治承二年夏、そして配列から考へて、俊成の出家した安元二年九月二十八日をそれに当てることができる。即ち、仁安頃を中心として撰集の爲の資料蒐集が活潑に行はれて居り、安元頃迄にはほゞ形を整へてゐたと推測されるのである。

しかば、この時期は歌壇史的にみて、どのやうな時期に當つて居り、その中でどのやうな意味を「撰集の様なもの」は持つてゐたらうか。

三

詞花集の奏覧された仁平元年（1150）から、千載集の奏覧された文治四年（1188）の三十七年間を今仮りに千載集時代と呼ぶことが許されるならば、千載集時代歌壇史は、ほゞ次の三期に分けて考へるのが適當かと思はれる。

- | | |
|-----|--------------------------|
| 第一期 | 仁平～保元年間 |
| 第二期 | 前期 平治～永万年間
後期 仁安～安元年間 |
| 第三期 | 前期 治承～元暦年間
後期 文治年間 |

右の分類に従つて歌壇情勢を概観すると、第一期は、詞花集成立直後の、同集に対する批判の氣運が非常に強かつた時期であり、一方撰者顯輔を中心とする六条一門側もそれに反撥をするといふ、その背景には鳥羽院権力と崇徳院権力の政治的抗争にも連なつてゐた、撰者側とそれに不満を持つ崇徳院中心の歌人グルー

ブとの対立した時代であつた。その様相は、後葉集序・和歌色葉・正治奏狀・八雲御抄等から帰納的に知ることが出来るが、詞花集撰進を命じた崇徳院自身もこの集に不満であり、改撰の意図さへあつた事実、崇徳院近臣の教長が撰じたといふ拾遺古今の目的、為経（寂超）の後葉集の編纂の意図等は全て詞花集批判の氣運の現はれてあつたといへよう。六条家側では清輔が、牧笛記を著して拾遺古今に應じたといふが、清輔自身も袋草紙によると父の撰集方針に充分な満足を感じてゐなかつたやうであり、詞花集の採つた撰集方針である、古い時代に厚く当代に薄いといふ点は、單に崇徳院歌壇の歌人を刺戟したといふ点にとどまらず、広く当代歌人の歌に対する意識に關しての差異感を感じさせるものがあつたのであらう。歌人としての顯広（俊成）の身を置いてゐたのは、かうした背景に於ける崇徳院歌壇だつたのであり、特に崇徳院から拔擢されて久安百首の部類を命ぜられた事実（これは恐らく、谷山氏の御推測の如く、詞花集奏覧^{註5}以後のことであり、同集への院の不滿の現はれの一つとして理解すべきであらう）などは、後の俊成の歩みの方向を既に決定づけてゐたといつてよからう。

保元の乱は歌壇の情勢をも一変させた。崇徳院派は一掃され、中央歌壇の主流は乱の前年に薨じた顯輔の息子達、清輔・重家・顯昭らの六条一門によつて次の時代に承けつがれてゆくのである。

第二期は、保元三年（1156）の二条天皇即位による内裏歌壇の

發生を以て出発点と見做し得る。この期は、顯輔の衣鉢をついだ前記の六条家の人々、就中清輔が、俊成と中央歌壇で拮抗した時期であり、清輔の歿、俊成の入道をも以て一段落があつたと考へた。そして、この期は更に二分して考へることが出来るかと思ふ。その前期にあたる平治から永万に至る間は、二条天皇歌壇を中心とした六条家の活躍が顯著な時期であり、清輔が「袋草紙」を二条天皇に進覧（平治元年）したり、重家らが二条院百首や内裏歌会で活躍したのも、又顯昭の「今撰集」清輔の「統詞花集」の撰集の成立の基盤もこの時期に存在したのであつた。二条院の崩御は一つの期を劃したといつてよからう。この期の顯広（俊成）は、未だ有力歌人の一人といふ程度の存在にとどまり、六条一門の勢威に対抗するまでには至つてゐない。

後期の初まる仁安頃は、政治的にいへば平氏の勢力が強大となり初めた（仁安二年、清盛太政大臣となる）時期で、歌界も一層の活況を呈する様になる。

二条院を失つた六条一門は、仁安から嘉応にかけては松殿攝政基房家との結び付きが目立ち（仁安三年の同家詩歌絲竹会、嘉応元年宇治別業歌会等で主導権を握つて居り、同じ年清輔は「和歌初学抄」を基房に献じてゐる。重家が右の絲竹会で三事を兼ねたといふ評判をとつたのは有名である（「玉葉・重家集等」）、承安から安元にかけては九条兼実（基房の弟）家での歌壇で活躍するのである。

一方俊成（仁安二年顯広は本流に復して俊成と改名し、安元二年出家して釈阿と称するから、この時期は丁度「俊成」時代に当

るわけである)も急速度に活発な活動始める。撰関家にこそその場はなかつたものの、この期に入ってから経盛等を中心として特に活動の盛んになった平氏系歌壇や、その他一般の全歌壇的な規模を持った歌会・歌合等では充分清輔に拮抗するだけの指導力を示し、中央歌壇は文字通り清輔俊成対立の時代であつたといふことができる。強ひていへば、第二期は前半は清輔、後半は俊成がやや優勢であつたと見てよからう。

又この期には、中央歌壇の構成要素としてもかなり大きな位置を占めながら、他方、盛んに自由な作歌活動をしてゐた地下や隠遁者層のグループが存在した。この人々の活動が次第にグループ意識を強めていつた事情に関しては築瀬一雄氏の御研究が詳細であるが、「歌苑抄」「拾遺歌苑抄」等はそうしたグループ意識の所産であるといつてよく、この時代の特色である隠遁者地下階層グループの幅広く且、活発な作歌活動を示すものと考へることができさる。

和歌色葉や八雲御抄に見える私撰集の中、かなりのものは大体この期を中心に生み出されたものと推定されるが、それらはかうした歌壇の活況に何らかの形で刺激を受けたものといふことができる。この歌壇の活況は、平氏といふ強力な新興階級による政情安定が大きな原因となつてゐることは否めないであらう。これは同じ理由からでたらうらはらな事情——つまり、平氏により権力の座から離れねばならなくなつた人々によつても支へられた活況なのであつた。

この政情安定は、後白河院の院権力と平氏との結合に出発点を

持つたものであつたが、本来的に性格の異なる両権力の衝突は漸く表面化し、治承元年(1171)には鹿谷事件が発生した。これは、院権力が平氏から実権を奪回しようとする試みの現はれてあつたが、爾後、両者は権力をめぐつて激しく対立の起伏を繰り返してゆく。

歌壇も丁度この頃に転機を迎へる。安元二年(1176)暮秋、数年来健康の思はしくなかつた俊成は重態に陥入り、死線をさまよふに至る。そして、対立者清輔も翌年六月二十日には白玉楼中の人となるのである。歌界は二人の有力な指導者を失ふ。即ち千載集時代第二期の終焉である。

第三期は動乱と表面的な安定とを交互に繰り返す社会を背景とした時代で、平氏勢力がほぼ壊滅した元暦元年(1185)までの前半と、天下が源氏の勢力下に入つた文治年間とは区分することが適當かと考へられる。前期では兼実家を中心とする歌壇の活発な活動と、歌林苑のパトロンであつた賀茂社神主重保等の活動が目につくが、いづれにせよカムバックした俊成の絶大な指導力は動かし難いものがある。第二期までの主流であつた六条家一門は、清輔を失ひ、重家は目立つた活動をせず(治承四年に薨ずる)、顕昭は著述の方面に専念するといった状態で、季経や一世代若い経家らの層のみとなり、非常に弱体化を余儀なくされる。この期も、実質的には第二期の主要歌人——特に地下隠遁者層の人々——が活動した時期で、終り頃から次の世代の歌人達の登場を見るのであるが、俊成が絶対的な権威としての位置を占める点に、第二期

との相違を見たいのである。

養和元年(1181)、俊成は初めて院御所に参上拜謁を賜る(明月記)。歌壇に於ける地位からいつても、勅撰集撰者としての条件は熟する(院宣との関係は後に触れるが、重要な手懸かりであらう)。

源平の相剋は歌壇活動を低調化させるが、やがて平氏一門は西海に滅し、京都に平和が回復する。

歌壇も新しい歩みを始めるのであるが、その新しい歌壇の担手は中央では既に若年の層に移行して居り、親幕政権の中心として時めくことになった兼実家でも、歌の催は子の良経が中心となり家隆・定家といった人の登場する時代となる。

一方、六条家歌人達による「反俊成の氣運も生じてくる(二七番歌合(一番判註)が、大勢は御子左一門の中心となった歌壇の様相が展開されてゐる。そして、西行が移住してから特に活況を呈するやうになった伊勢歌壇が、中央歌壇との接点を更に拡げて同一圈内に入り込んできたのもこの時期であるといへる。かうした歌壇的状况下に、勅撰集としての千載集は成立したのである。

以上、大雑把ながら千載集時代の歌壇史を概観したが、しからば先に考へた「撰集の様なもの」「打開」は、この中でどのやうに位置づけられたらよいであらうか。

四

先に見たやうに「撰集の様なもの」は、応保頃を上限とし、仁安頃を中心に撰集の過程にあり、少くとも安元二年の俊成出家

以前には成立してゐたと考へられる。とすると、この時期は歌壇史的にいへば第二期の前期に出発点があり、その後期に中心があつたといへる。つまり、政治的には平氏一門の全盛期であり、歌壇的には清輔・俊成の拮抗時代に當つて居り、政情が安定し、歌壇が活況を呈した時期にその中心があつた訳である。それ故、現象的には、この時期に輩出した数多くの私撰集と同一に見做すことも許されるであらう。しかし、当時の俊成の歌壇的な地位から考へる時、対立者の清輔が二条天皇の恩寵を得て勅撰集たることを目指して統詞花集を編んでゐたことは充分意識してゐたらうから、単なる私撰集一般とは區別して、少なくとも統詞花集とは並べられる程度に考へることが必要であらう。このことは先引の資料からもいへることであつて、Cの経盛の歌の場合のみが俊成の方から歌を求めたものであることを見ても、俊成が撰集をするといふことは当時の歌人達にとつては極めて権威のあることとして写つてゐることを示すものといへよう。それは、Dに見られるやうに、清輔にさへ氣懸かりにさせる性格のものだつたのである。

こゝで、成立期の問題をもう少し深く考へてみたい。

「撰集の様なもの」の出発点は仁安年間よりも少し遡つて考へねばならないことは既に述べた。するとそれは二条天皇の在位期間に當るから、清輔が盛に統詞花集の撰集を行なつてゐた時にも當つてゐる。統詞花集の性格は、谷山氏の適確な評の通り、^註「補正詞花集」としての意味を持つてゐた。つまり、詞花集に対する批判の氣運の強かつたことに対して、自分もその不足を認識してゐるが故に、六条一門の側からの回答といふ意味が統詞花集

にはあつたと思はれるのである。

一方、俊成が撰集を志した理由の根底にはやはり、詞花集批判の氣運を醸成させた嘗ての崇徳院歌壇の目指したものに連なるものがあつたと思はれる。反詞花集的な立場を打出した撰集——それは当代歌人を満足させ且、三代集の規模を持つた本格的な撰集であらねばならない——が、六条一門以外の歌人の手で作られるとしたら、当代では俊成に於て最も必然的な理由があつたといへる。とすれば、その発端は、長寛二年(1160)の崇徳院崩御にあつたのではないだらうか。院の崩御後、程なくして俊成の許には彼宛の御作の長歌が届けられた。遠い行在所にあつた院が、特に自分を思ひ出して詠み遣してくれたその信任の程に感動して「みやこにおはしましゝときかやうのみちにもつかうまつりし人はおほかりしをとりわきおほしめしめてけむ事もいとかなしくて云々」といふ詞書をつけ「人しれず」ひそかに返歌としての長歌を詠じてゐる。こゝには、嘗て数多の先輩を差置いて久安百首の部類を命ぜられた時の感激との二重像は感じられないであらうか。崇徳院追悼の意を撰集の動機に置いてみたい所以である。勿論、それは切掛程度に考へておかねばならぬであらう。しかし、既に谷山氏によつて指摘されてゐるが如き、千載集内部での久安百首の占める意味の大きさ^{註10}を考へる時、この想定はあながち無理なものとも思へないのである。

もしこの仮定が許されるとするならば、長寛二年(1160)頃から歌を集め始め、二条院歌壇の消滅によつて統詞花集が勅撰集たる事を佚した事がますます刺激になつて撰集作業を進めたと考へ

ることができよう。資料Dの清輔の歌は、統詞花集が勅撰集となり得なくなつたことをはつきりと自覚し、新たに俊成の撰集が有力な存在として認識され始めたことを示すものと考へられるが仁安からさう程へた時とも考へられない。そして、この「撰集のやうなるもの」は、どの程度迄まとまつたものかは判然としなが、ともかくも、先述の如く、安元二年頃迄には或程度の形が整つてゐたものと考へられる。この或程度形の整つた「撰集のやうなるもの」はその後、どのやうになつたであらうか。

谷山氏は、和歌色葉に、千載集を後拾遺集統詞花集と同列に断じ私撰集が勅をうけることによつて勅撰集となつたもの、とする記述に注目され、俊成の兄快修が後白河院の護持僧であり、院の信任が厚く、俊成についてもいろいろ院に依頼し得る位置にあつたこと(「明月記建保二年三月一日条」)や、京極局が院側に侍してゐたこと等から、或は勅撰の許しを得て、千載集への道を開いたのではないかと示唆されてゐるのであるが、この見解は妥当なものと思はれる。

といふのは、資料Fの俊成の歌が新古今集巻十八で(二八四五)にとられてゐて、その詞書に「千載集えらび侍りける時ふるき人々の歌を見て」とあり、長秋詠藻の「撰集のやうなる事」が明らかに「千載集」として受取られてゐるからである。それも、撰者名注記によつて、この歌を採つた一人が、定家である(八代集全註付撰者名考異)ことがわかる為に価値があると思はれるのである。定家は、長秋詠藻からこの歌を撰んだ際、その作歌年次等についても充分承知してゐたと思はれる。それが右の様に記されてゐるの

だから、「撰集の様なこと」については、千載集の撰集作業に於ける一段階であるといふ認識を定家はしてゐると見ることが許されよう。従つて、「撰集の様なもの」は千載集に発展的解消を遂げたのだといふことが結果的に知られるわけである。

すると、次の問題は、「勅撰集」に移行了した時期は何時か、といふ点である。先程の快修が入滅したのは承安二年（1172）の事であつた。京極局が側近の奏者であつたのは治承頃までとされてゐる。

ところで、伏見宮記録八十六の親宗卿断簡の文治四年四月廿二日の条には「今日入道俊成卿進撰集出院^{云々}此十余年来蒙院宣令撰定也其名千載和歌集^{云々}」とある部分がある。文治四年から「十余年」を逆算すれば、十四年として承安四年、前後二年づつ幅を見るとき承安二年から安元二年頃といふことになる。親宗卿記の根拠となるものは不明であるし、親宗の記憶違ひもあるかもしれないが、親宗は後白河院にも近い存在であつただけに、信頼すべき可能性もなしとはしない。もしこれが信用し得るとすれば、承安安元の頃、院宣があつて勅撰集に移行了と考へることもできる。

しかし、拾芥抄の院宣宣下の時期である寿永二年二月を採るならば、「撰集の様なもの」は安永二年出家以前に或程度形を整へたが病氣や出家で一時そのまゝに放置され、健康回復後歌壇に於ける絶対的地位の確立してゐた養和元年に初めて後白河院の拝謁を賜はつて、自分の実力と年来の希望を認めさせ、その時期の充分に熟した十四ヶ月後の寿永二年二月院宣宣下によつて勅撰集

たる資格を獲得するに至つた、と考へるのが妥当であらう。いづれにせよ勅撰集に移行する以前にかなりまとまつた形の私撰の段階があつたことは事実である。

それがどの程度まとまつたものであり、どのやうな規模・内容・性格を持つてゐたかは勿論不明であるが、撰集の動機となつたと考へられる反詞花集の立場、といふものは、千載集に濃厚に出てゐるから、その中間段階に位置を占める「撰集の様なもの」はその線から大きく外れてゐるといふことはまず考へられない。従つて、千載集の重要な部分は、既にこの段階で形成されてゐたといつてよからう。

しからば、千載集の成立過程にかうした私撰の段階があつたといふことは、千載集にとつてどのやうな意味を持つてゐるだらうか。

このことは、後白河院にとつて千載集はどのやうな意味を持つてゐたか、といふ問題と関係してくるやうに思ふ。後白河院にとつて勅撰集を作らせるといふことは、崇徳院や後鳥羽院とは同じ次元のものではなかつたであらう。院は、他のどんな資質にもまして政治家であつたし、歌謡に対する好尚に比して歌に対する好みはほとんど示さなかつたといつてよい。従つて、後白河院歌壇などといふものは遂に存在しなかつた。院にとつては、勅撰集は、当時の教養ある治世者としてのごく当然な治績の一つといふ以上のものではなかつたであらう。極端にいへば、千載集が、たとひ現在のものと実質的に異質のものであつたとしても、恐らくそのまま院によつて受容されたとさへいへるのである。

このことは、形式的な面（例へば勅勘の者を入集させぬといった点）をある程度考慮に入れれば、撰者の主体的な意図がかなり濃厚に打出せることを意味して居り、千載集の本来的に持つてゐた私撰集的特徴は院によつては変革されずすむ、といふ意義を持つてゐたことを示してゐるのである。従つて、平氏全盛期に形を整へた「撰集の様なもの」は源氏の天下となつた千載集では、平氏色を払拭するといふ配慮は余儀なかつたことであらうが、千載集序に見られる撰歌範囲などは、私撰時代のものが、そのまま承け継がれてゐると考へてよからう。拾芥抄の院宣宣下状によると「近古以来和歌」を選ぶべく指定されたとあり、千載集序でも「後拾遺集に撰び残されたる歌、かみ正暦のころはひより下文治の今に至るまでのやまとうたを、えらび奉るべき仰せごとむありける」といつてゐるが、これは、院自身の意向といふよりも内容的にも形態的にも不十分な前勅撰集に批判的な立場から発した俊成の意図が、そのまゝ院の承認を得たことを示してゐると考へてよいのではないだらうか。

千載集は、序に掲げた旗標からいつても、實際の内容に依つても、又古来風体抄に徴しても、後拾遺以降の、特に「ざれ歌」的傾向の風潮を否定し、正統的抒情詩としての歌風の復興を庶幾したものであつて、その意味で三代集に直接接続する撰歌範囲を設定したものと考えられるが、かうした性格の集を成立させた基盤は、第三期の文治年間の歌壇には殆んど関係なく、第一期の詞花集成成立直後の歌壇に本質的な部分の萌芽を持ち、第二期の活況を呈した歌壇に成立過程を持つた「私撰段階」の中に存在したといふことができるであらう。

終りに、これはまだ思ひつきの域を出ないが、一つの問題提起として、八雲御抄私記にある「三五代集俊成」といふ私撰集について触れておきたい。

「三五代集」といふ名称は、常識的に判断して「十五代集」、つまり「十五代の天皇の御代の歌を集めた集」の意であらう。しかば「十五代」とはどの天皇からどの天皇に至る間を指したものであらうか。ところで、千載集の俊成自序を見ると、先引の撰歌範囲のところに「後拾遺集に撰び残されたる歌、かみ正暦のころはひより、下文治の今に至るまでのやまとうたを、えらび奉るべき仰せごとむありける。かの御時よりこの方、年はふたもゝちあまりに及び、世はとゞき余り七世になむなりける」といふ部分がある。これは單なる仮定にしか過ぎないが、この「十七世」といふ点と密接な関係があるのではなからうか。つまり序の「十七代」は、一条天皇から後鳥羽天皇に至る十七代の天皇の期間を指してゐるのであるが、「三五代集」の「十五代」はこの十七代から後の二代、即ち安德天皇と後鳥羽天皇の二代を引いたもので、一条天皇から高倉天皇に至る「十五代」を指すものと考へてみたいのである。

もしこの仮定が許されるならば「三五代集」は高倉天皇の在位期間（自仁安三年（1182）至治承四年（1184））に成立した俊成の私撰集といふことになり、丁度「撰集の様なもの」の成立期と時期が一致し、しかも撰歌範囲の点で、千載集の母胎たるにふさわしいから、或は「三五代

集」は「撰集の様なもの」そのものの完成した形であるといふことにならう。

但、私撰集といふ形で公開されたとなると千載集と結びつけて考へるには新たな問題が生じてくるので、「撰集の様なもの」が安元二年の俊成出家以前にまとめられて、その後勅撰集として再び手を入れられるまでの間、仮りに付されてゐた名称が何らかの形で伝へられて八雲御抄に入つたのではないか、といふ臆測のみを付して問題を後に残したいと思ふ。

〔この稿は六月四日中世文学会春季大会で発表した草稿を補筆訂正したものである〕

註1 「俊成の撰集の様なもの」 希木昭和十年十一月号。「藤原俊成年譜」幽玄の研究。「千載集と諸私撰集」人文研究昭和二十六年十一月号、昭和二十七年一月号等。

註2 伊藤嘉夫氏「山家集」(朝日古典全書) 頭註。窪田章一郎博士「西行の研究」等。

註3 「千載集と諸私撰集」(1)の註2に紹介されている。

註4 「長秋詠藻考」松田武夫博士(国語と国文学昭和五年八月号)。「俊成家集について」吉原敏雄氏(国語と国文学昭和十二年八月号)。「藤原俊成」福井久蔵氏・「長秋詠藻」松沢智里氏(古典文庫) 解題。

註5 「久安百首部類本と千載集」(国語国文昭和三十五年七月号)。

註6 「歌林苑の研究」樂瀬一雄博士(国語国文昭和十九年七月号)。

註7 樋口芳麻呂氏が「未刊国文資料刊行会会報17」に紹介された「拾遺歌苑抄序」(内閣文庫蔵「和歌序集」所収)によると歌苑抄の撰歌範圍は「永承以後承暦以往不入諸集之代抄内千三百篇」とあるところから、通説の歌苑抄とは別の私撰集だつたことが判明する。増葉集夫木抄等に見える歌苑抄は「拾遺歌苑抄」を指すのではなからうか。中原時元は序の執筆者であつて、撰者は俊恵だつたのであらう。

註8 判詞の内容は、当時の歌合の慣行である後日判が、方人の自由な難陳をスボイルしてしまつてゐることに對する批判で、当時規模の大きな歌合は大抵俊成の手許で判ぜられる場合の多かつたこと、後日判では豊富な歌学的知識を持つてゐても弁駁し得ないこと等から、日頃不満の六条家の人々が、衆議判たるべきことを提唱し、御子左側の若手もそれに応じたのであらう。

註9 「千載集と諸私撰集」

註10 「久安百首部類本と千載集」

註11 「千載集と諸私撰集」一の註2